

22年ぶりの春高記録 5000mで・・・

★上尾競技場は聖地

しらこぼと競技場は昨年の竜巻被害の影響を受け、今年の東部地区予選は上尾競技場で開催される運びとなった。

オールドファンにはなつかしい上尾競技場。

2004年に埼玉国体で、熊谷と、しらこぼと競技場が作られるまで、東部も県もこの上尾がメイン会場となっていた。1967年の埼玉国体のために作られたこの巨大競技場は、いわば埼玉陸上の聖地なのである。



過去、上尾競技場で開催された東部大会は、多くの大記録を生み出した。東部地大会記録も、その多くがこの聖地で作られたものである。

規格が異なる近年の投擲以外では、なんとそのほとんどが上尾で生まれているのだ。

しらこぼと会場での大会記録（投擲新規格除く）は幅跳びと **110mH 14秒65**（奥岡）のみ。しらこぼと会場に移って10年が経過するが、東部地区大会記録更新という事は、それくらい至難の業なのだ。

「東部を制する者は全国を・・・」昭和から現在も言われ続けている名言である。実際に多くの選手が東部大会を弾みに、インターハイでの優勝～入賞を毎年のように果たしてきた。



★上尾で短距離すべて更新

たしかに、しらこぼと会場は風が舞う。例えば測定上（+1m）・・・とあっても、いつも追い風とは限らないし、数値に出ない横風もかなり強い。周囲を遮蔽する建造物は一切ないので、通称・風の通り道と言われているのだ。

（したがって2m以上の風で、非公認の大会記録を超える好記録はあったかもしれないが）

その点でも国体を意識して作られた上尾が、地理的にも、強風遮蔽構造的にも空気が乱れない。昨今の競技場でも、観客席の大きい安定した空気の競技場（半ドーム型）が好記録

を生みやすいのは必定。

上尾に戻った今回は、奇しくも100m（28年ぶり）、200m（20年ぶり）、400m（22年ぶり）に大会新記録が誕生したのであった。

100m 10秒61 200m 21秒57 400m 48秒13がマークされた。



いずれもインターハイ決勝進出相当の素晴らしい記録である。8種混成では県高校新記録がマークされた。2位に1000点もの大差、県記録を300点もしのぐ全国制覇が期待できるレベル。

8月の山梨では、みな「東部地区大会伝説」を全国に示してもらいたい。

★後輩の挑戦をはねの続けた福田の15分06秒

福田卓人選手が15分06秒をマークしたのは、今から22年前の駒沢五輪公園（右写真）。1992年の関東大会であった。私と兼子（39回）は雨中の駒沢へ足を運んだ。

その日はひどいどしゃぶりであった。

大会の目玉は埼玉栄女子・柿沼選手の短距離3冠、ならびに高校新記録、日本新記録誕生であった。

室伏選手も登場した。



竹村監督の春高チームは、高跳びの川田（春高記録保持者）が水溜りの助走路に苦しんでいた。大会も1m80cmでインターハイの切符がかかるような状況だったといえ、その台風のようなドシャ降り具合を理解いただけだと思う。

福田の5000mの応援には私も熱が入った。長距離で関東に出た母校選手を見たことがなかったので必死になって叫んだ。

当時の春高は、工藤先生（現・校長）によるロングチーム活躍の時期であった。

福田、黒川、浅野が春高3羽鳥と称され、新人県大会では800m、1500m、5000m、3000mSCすべてに入賞していた。

平成3年度県高校新人大会

800	⑤	1.56.26	黒川 哲也
1500	③	4.01.03	福田 卓人
1500	⑦	4.01.74	黒川 哲也
5000	⑤	15.21.03	福田 卓人
3000SC	⑥	9.29.34	浅野 岳晴
走高跳	①	1.95	川田 健一
砲丸投	⑦	12.90	池田 成秀
円盤投	⑤	40.00	神沢 直史
やり投	④	53.18	石田 知
保楼投	⑥	44.36	二瓶 拓

平成4年度学徒総合体育大会

800	②	1.55.61	黒川 哲也
1500	③	3.58.12	福田 卓人
1500	⑤	3.59.41	黒川 哲也
5000	⑥	15.09.10	福田 卓人
走高跳	②	1.95	川田 健一
三段跳	⑧	13.77	中島 潤史
砲丸投	⑦	13.70	池田 成秀
保楼投	⑧	48.78	清水 慶久

(翌年のインターハイで清水慶久は5位入賞の金字塔をうちたてる)

高2で1500m3分58、5000m15分21に達していた福田は、その関東の決勝で春高記録を15分9秒から3秒短縮し、15分6秒29をマークした。入賞はならなかったが、関東の大舞台で自己ベストを更新したのだから賞賛に値する活躍であった。

しかし5000mの記録更新はこの時から一転、多くの春高陸上部現役がチャレンジしたが、超えることはできなかった。佐藤も、石原岳も、花井も及ばなかった。3000mSCの大久保も届かなかった。(大久保は今年の六大学戦3000mSC優勝している)

★16歳の偉業

福田の記録を破るチャンスは突然やってきた。

新2年生・青木涼真選手が東部地区上尾大会で5000m15'01"64をマークしたのであった。駅伝強豪校の花咲徳栄や春日部東ら6人を抑え見事に優勝。記録も素晴らしいが東部5000m優勝もいつ以来か・・・

★新旧5000mの顔

春高長距離のパイオニアといえば杉崎 孝（高9回）先輩。

春高陸上長距離歴史に燦然と輝く選手である。もはや言うまでもないが、2年生でインターハイ山形大会5000m準優勝、中央大時代箱根駅伝複数回優勝、実業団時代3000mSCで日本記録更新・・・

昨年のOB総会では新入生の青木君と、杉崎先輩、福田君と新旧の春高記録保持者が偶然にも同席した。福田も杉崎さんと会うのは初めてであったそうで、記念写真を撮っていた。

この昨年6月の時、福田は「もう15分くらいではだれも驚かない時代。早くこの15分6秒を破って欲しい。」と言っていた。彼も最初に春高記録を更新したのが2年時の夏であった。すぐに3年になるし、当然本人もある程度のスケジュールは把握しているはずなので、記録更新を意識して臨んでほしいと、青木選手に伝えたいそうだ。注意点は故障。無理は禁物とは言っても、記録を狙うとケガと表裏一体であるのは言うまでもない。



★始まったばかり

春高記録更新で一番喜ぶのはOBである。これは母校陸上部を誇りに思い、そこで研鑽を積んだ者同士だけが味わえる特権。男として挑んだ同じ夢を、後輩が達成してくれる。こんな贅沢な喜びはない。

とはいえ、まだ2年生の選手にとって、達成感は全くないであろう。インターハイへの初戦にすぎない・・・くらいの方がちょうど良いと思う。記録よりも、県、関東を勝ち抜いていく事に照準を絞っていることであろう。困難なのは必至だ。

ただケガをせず、本人がたのしく走ってくれることが一番の願いである。

我々はただ平静を保って暖かく見守っていく事にしよう。それがOBの愛情というものだ。